歴史館だより 創刊号

財団法人最上義光歴史館　平成六年三月発行

最上義光歴史館全景

「最上義光歴史館だより」の創刊にあたって

財団法人最上義光歴史館
理事長　佐藤　幸次郎

当館は、平成元年十二月の開館以来、今年度で五周年を迎え、入館者が年毎に増加し、展示品も地域の方々から御寄贈・寄託を受け充実してきております。これまで、ご協力を賜りました関係各位に深く感謝を申し上げます。

開館五周年にあたり、「最上義光歴史館だより」を創刊することにいたしました。これは、「最上義光公」の山形における業績を顧みて、それを顕彰し、郷土の歴史遺産を市民の財産として継承していこうとする当館の設立目的に沿って、今後さらに、市民の皆様のご理解を深めていただこうと企画したものであります。

最上家は、約六百年前に斯波兼頼（最上家初代）が山形に入部して、第十一代の義光公まで約二百余年の間当地を治めました。義光公は、関ヶ原の功により五十七万石の大々名となり、居城の山形城の構築や城下町の整備に尽力し、今日の県都山形の基礎を築いており、その業績は誠に大きなものがあります。

この「たより」が、義光公の遺徳を偲びつつ、郷土の歴史を理解する一助となれば幸いと存じます。

「たより」発刊にあたり、御執筆御協力を賜りました関係各位に深く感謝を申し上げるとともに、今後とも御支援を賜りますようお願い申し上げます。

「最上義光歴史館の開館から五年目をむかえて」

最上家四十七代当主
最上公義

平成元年十二月一日、厳粛なうちにも華やかに執り行われました「最上義光歴史館」の開館式の模様が、つい先日のことの様に思い出されますが、既にその後、五年の歳月を数えるに至りました。

この間、山形市当局・山形新聞グループ・歴史館関係者並びに郷土史に、特に関心をお持ちの方々の御努力と御尽力に依りまして、当歴史館が他府県の歴史館等と名実共に比肩出来る内容のものとなったことを、皆様と共に誇りに存ずる次第であります。

開館以来、毎年開催されました多彩な展覧会・史跡探訪・歴史講演会等に依って、山形の一般の方々をはじめとして、地方からの御来会の方達の郷土史並びに歴史に対する認識が大いに深められたものと思います。それは、社会貢献という歴史館の使命の達成に役立ったものと確信致します。私自身も、歴史館に展示された文物や図録を拝見して、大いに視野を広め、戦国時代を中心とした歴史を改めて学び、思わぬ勉強をさせて頂きました。戦国時代以後も、軍事的拡大という従来のパターンに終始し、その後を継いだ徳川幕府がまた、大幅な粛正に依る停滞へと進んで行ったことも、大変不幸なことでありました。

今、我々は再び、軍備拡張と規制に依って停滞に陥る様な、過去の失敗を反省し、自由競争に依る活力を保ちつつ、新しい成長への道を探らねばならぬと思います。それは恐らく、物質的成長から知的成長への道ではないかと、私は思います。

主として、戦国時代を勉強・回想するために、各方面より資料を蒐集して頂いている「最上義光歴史館」から、更に多くの知識を吸収し、新しい「知恵の文化」への道を真剣に考えたいと思います。

歴史館の使命は一層重要になります。皆様の更なる御活躍をお祈り致します。

最上義光所用の兜（最上公義氏より寄託）

最上義光歴史館五年間のあゆみ

【平成元年】

十二月一日
最上義光歴史館開館（最上義光歴史展）

【平成二年】

二月一日
財団法人最上義光歴史館設立
五月十二日～十四日
国宝甲冑と瀬戸内味覚の旅
六月二十三日～七月十五日
城郭古絵図展
※山形県内の城絵図二十五点を展示公開
十月十七日～十一月十八日
やまがた甲冑展
※山形県内の甲冑十二領を展示公開
十月十八日
義光祭（歴史講演会）　講師　高橋富雄先生
演題　「斯波氏と最上氏」
十月二十七日
史跡めぐり（山形市内の最上家ゆかりの寺院を見学）

【平成三年】

三月三日
歴史講座　講師　高橋信敬先生
演題　「最上義光の町づくり」
三月十日
歴史講座　講師　伊豆田忠悦先生
演題　「最上氏領国の形成」
三月十五日
歴史講座　講師　伊豆田忠悦先生
演題　「最上氏領国の崩壊」
五月二十一日～六月十六日
日本名刀展
※古刀の代表的な刀工の作品を中心に展示公開
八月六日～
増築工事開始
九月二十日～二十一日
歴史探訪会（最上地方を中心とした城跡の見学）
十二月二十日
歴史講座　講師　後藤禮三先生
演題　「最上義光とその周辺」

【平成四年】

一月十日
歴史講座　講師　横山昭男先生
演題　「最上義光と近世山形の開幕」
一月十七日
歴史講座　講師　誉田慶信先生

「義光祭」に偲う

光禅寺住職　最上顕一

義光祭のことを知っている人が段々と少なくなってきて、時の流れをしみじみと感じさせられる昨今であります。今日、ここに義光祭の由来と当時の様子を記るして追懐してみたいと思います。銀行のお仕事をしながら郷土史の研究をされていた渡辺弥太郎氏が、山形中興の祖である義光公の遺徳が忘れ去られようとしている現状を深く嘆いて、何とかしておかなければならないと思いつづけておられました。たまたま大正二年（一九一三）が義光公の三百年忌に当るというので、この際何とか公の遺徳顕彰の道をつくっておきたいと思い、自らが発起人となり、市内の有力者に呼びかけて、明治二十七年の市南大火で消失した義光公の霊廟跡に五輪塔を建立し、公の命日である旧暦一月十八日に厳かに追悼法要を営んだのでありました。その後、義光公の遺徳賛仰の声が次第に高まり、秋には叶内長兵衛氏等数人の市会議員の建議により、義光公の三百年祭を山形市主催を以て行うことが決議されたのでありました。そして、十月十七日に提灯行列、十八日に三百年祭法要、十九日に仮装行列、二十日には市内小学校生徒による旗行列が行われたのでありました。これが「義光祭」の発祥なのであります。以来、十月十七日の神嘗祭（祭日）の日を卜して毎年仮装行列が行われ、これが義光祭として定着し、終戦の数年前まで継続されてきたのであります。各町内からは山車や仮装した人達の行列が延々と街をねり歩き、最後は光禅寺に来て墓前に参拝し解散となったのでした。当日、寺にはおにぎりや酒などが沢山用意されて参加者の労をねぎらったのです（すべて市が主催）十月十七日は神嘗祭という祭日で、秋の農作業が一段落した頃なので、街は近郷近在から何万という人出で賑わい、山形の秋を彩る大きな行事となったのであります。義光公の遺徳を偲ぶにふさわしい行事であったと思います。

光禅寺には、当時の様子を偲ぶ写真が何枚か本堂に掲げられています。今、往時を追懐して感慨一入深いものがあります。

尚、義光公の追悼法要は毎年十月十八日。今に至るまで継続されてきています。現在は光禅寺が主催して、有志団体の協賛を得て（献茶、記念講演等もあり）厳かにとり行われている。

演題　「戦国の世と最上義光」
一月二十一日
歴史講演会　講師　安西篤子先生
演題　「戦国時代の女性たち」
二月二十八日～
増築工事完了（新収蔵品の公開）
四月十七日～五月十七日
戦国武将墨跡展
※戦国武将の書状を中心に五十二点を展示公開
九月十二日
歴史講演会　講師　永井路子先生
演題　「戦国時代の群像」
十月一日～二十五日
最上家名宝展　山形を築いた最上義光
※最上家に係わる貴重な名品三十八点を展示公開
十月十六日～十七日
歴史探訪会（庄内地方を中心とした城跡の見学）

【平成五年】

一月二十日
歴史講座　講師　伊藤清郎先生
演題　「山形県内の中世城郭をめぐって」
二月二十日
歴史講座　講師　野口一雄先生
演題　「金属の伝承と山形」
五月一日～三十日
斯波と最上　最上家菩提寺展
※最上家歴代の菩提寺の紹介と各寺院の名品を展示公開
九月二十四日～二十五日
歴史探訪会（中新田町及び平泉寺、えきし藤原の郷等）
十月一日～二十四日
日本刀の美　郷土の刀工と県内の名刀
※古今の山形出身の刀工の作品と県内の名刀を展示公開
十月八日
山形市清源寺より「武蔵野図屏風」寄託
十月十二日
歴史講演会　講師　北原亜以子先生
演題　「戦国時代の妻たち」
十二月十一日
こども講座　講師　上林恒平先生
演題　「カタナとヨロイのはなし」

【平成六年】

二月五日
歴史講座　講師　武田喜八郎先生
演題　「戦国時代の手紙を読む1」
二月十九日
歴史講座　講師　武田喜八郎先生
演題　「戦国時代の手紙を読む2」

まず足元の文化から

理事　板垣貞英

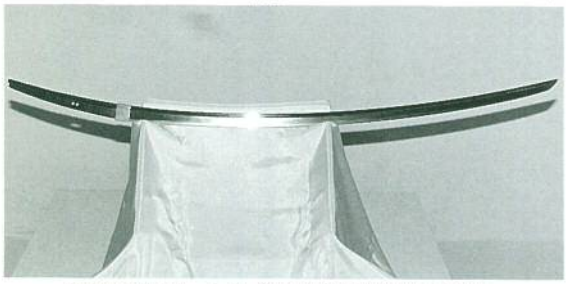
山形市市制施行百周年記念の一つとして、平成元年に開館された「最上義光歴史館」も早や齢い六歳を数えることとなった。

その間平成四年には展示会場と収蔵庫の増築があり、開館当初よりは一層充実したものとなった。

またこの六年の間には、山形城東大手門の復元工事も完成し、霞城一帯は、「山形城址」、「県立博物館」「旧済生館」、「山形美術館」そして「最上義光歴史館」と文字通り山形の顔としての歴史文化ゾーンを形成している。

ところで、歴史館は開館以来、八回に及ぶ特別展示企画展を開催しているが、次の五回の特別展にはそれぞれ立派な図録が刊行された。

1 開館記念展（平成元年）
2 山形県城郭古絵図展（平成二年）
3 戦国武将墨跡展（平成四年）
4 最上家名宝展（平成四年）
5 斯波と最上（最上家菩提寺展）（平成五年）



重要文化財　太刀 銘 安綱（号鬼切）の展示

特別展の展示風景

これらの図録は、豊富な写真と共に詳細な解説が加えられたもので、ひとり参観に際しての便に供されたのみならず、墨跡展の図録等は館主催の歴史講座「戦国時代の手紙を読む」のテキストとして格好の資料となった。

また「山形県城郭古絵図展」の目録は、幕府に上呈された正保城絵図の現存六十三枚のうち、出羽国関係の六枚の全容を紹介すると共に、県内の城古絵図を総まとめしたはじめてのものであり、図録それ自体が資料的価値を持つものである。

また最上家名宝展に際し展示された重要文化財（号鬼切）の太刀は、源氏重代の宝刀の一つとして最上家に伝えられたものであるが、故あって京都北野天満宮の所蔵となっていることから、本県から見ればいわゆる幻の宝刀に近い存在であったが、最上家移封後三百数十年を経て再びこの本家の最上の地に里飾りして、直接これを目のあたりにすることのできたのは誠に有難いことであった。同時に展示された太刀の最上光忠、一遍上人絵巻も重要文化財の指定を受けているものである。

国指定の文化財の移動展示にあたっては、貴重な文化財の保全という立場から展示会場における温度、湿度、換気、採光等あらゆる面から酷しい条件を充足しなければならないが、歴史館の増改築に当ってこれらの条件を凡てクリアすることができるようになったわけで、これからも重文クラス以上の展示が期待できるわけである。

過日上野の森（国立西洋美術館）のバーンズコレクションに立ち寄ったところ、数千の参観者が列をなして、入館するのにも何時間かを要した。列の中にあって、はて文化の国際化とは何か、日本人であるわれわれ自身果して日本の歴史と文化にどれ程の関心と愛着とを持っているのだろうかとつくづく考えさられたことである。それだけに歴史館に期待するものが大きい。

最上家名宝展の展示風景

――歴史探訪――
参加者の声……

江俣　阿部　久照

私が、子供の頃の遊びと言えば、霞城公園での魚つり、冬は土手での竹スキー、と格好の遊び場であった。又、霞城公園は子供の頃から、親より、最上義光の城跡で〝血染めの桜〟の話等、トント昔話のように聞かされて育ってきたのです。私が生まれた所は旧町名「南追手前」、今の城西町であります。昭和四十年頃、家を改築したところ、錆びて折れた刀や家紋のある汁わん等が出土したが、捨ててしまったのを憶い出します。後から調べて見ると最上時代に上ノ山兵部の上屋敷だった所であり、幕末の頃には、下級武士の長屋跡だったことがわかりました。

そのような事から、私は、郷土史の深く興味を持ち、郷土史資料を集めては〝現地行こう　現物にさわろう〟をモットーに歴史探訪し、昔の武士のロマンを求めて楽しんで居ります。

最上義光歴史館事業の一つ『歴史探訪会』に、私は、積極的に参加しています。

長谷堂城に登って…

長谷堂は〝出羽の戦い〟のあった所

出羽の攻防となった長谷堂は、まだ昔の面影が残っており、連郭式山城で、三方は急斜面、下は本沢川が流れて堀として利用し、空堀、大手門跡、曲輪等が残っていて、正に自然の要害である。これでは、上杉も攻撃できにくいな…と感じた。山頂の本丸跡に登ると上杉軍が陣と張った菅沢山、また、激戦場となった周りの田が一望できる。近くには、谷柏楯、成沢楯、上ノ山城が見える。当時は、ノロシを上げて合図を送ったりしたでしょう。また、山頂から見た山形城は少し霞んでいた。〝出羽の戦い〟当時もそうだったのだろう。だから、霞ケ城と言うんだそうです。そんな事が憶い浮かぶようだ…。

最後に、歴史探訪に参加して、実際に現地に行って、物を見て、専門の先生に話を聞いて、勉強できた事に感謝致します。

私達は、これから若い人にも語り継いでいかなければならないし、後世の人に残すためにも、最上義光歴史館の事業を長く続けてほしいと考えます。

緑町　佐藤　房

山形生まれ、山形育ちの私が縁あって遠く北海道小樽の地に生活をし、いま四〇年近くも経て故郷に帰り、リタイヤ後の余生を送る身になった時ふと気がついたのは山形の郷土史を知らないことでした。

平成三年春、復原完成した山形城跡「二ノ丸東大手門」を見に出かけた折、私の記憶にあったのは終戦後数年の堀端と、最上義光公の名前でしかなかったのです。

その様な折り、友人から歴史探訪会のあることを知らされ良きチャンスとの思いで申込をしたのがきっかけで、以降二回城郭めぐりに参加見学させて頂きました。

同年九月、霞ケ城東大手門の見学から始まった探訪会の行程では数々の懇切なご説明を受け、始めてふれる郷土の史跡に緊張の思いを致し、県内にかくも多くの城跡がありそれが大切に保存されている現状に大きな感銘を覚え、改めて歴史の深さを知らされました。

特に印象深かったのは、静寂の長谷堂城跡と風光明媚な清水城跡、共に地の利を活かした築城とのこと。中でも清水城本丸跡の台地に立ったとき、その自然の美しさに心を打たれた。東方の要害となった眼下の最上川は今も変わらぬ豊かな水を運び、西の深い谷には自然の要害の面影がしのばれ、五〇〇年もの前に展開されたこの静かな土地の生活を想像するとき肌に感じる歴史がありました。

翌四年十月、湯沢城跡、本荘城跡、そして酒田の城輪柵址跡見学等の探訪会に参加、宿泊先の湯ノ田温泉旅館の窓から眺めた日本海の雄大な落陽に、時の流れに伴う様々の変遷に想いをめぐらせ、自分の人生をもふり返ってちょっぴり感傷的になってしまった。

一人一人の歴史と知恵が積み重ねられ、それが腐葉土となって郷土山形の文化と豊かな生活があるのではないかとの感が、垣間見た歴史探訪城郭めぐりの素直な気持でした。

最上義光歴史館の紹介

最上義光歴史館は山形市制施行一〇〇周年を記念して、平成元年十二月一日に開館いたしました。建物は、鉄筋コンクリート造二階建となっており、屋根が日本風の切り妻造りの他は、全体としてヨーロッパ風の建築様式を用い、前庭と調和のとれた建物となっています。

平成二年には、増築による展示室の増設、収蔵庫、喫茶室等が造られ、より充実した施設となりました。

館の活動としては、現在の山形の繁栄の基礎を築いたといわれる最上義光を中心に、最上家に係わる貴重な資料の収集、保全及び調査研究等を行い、広く一般に公開しています。また、特別事業として、特別企画展、史跡めぐり、講演会、講座等を開催し、郷土の歴史と文化財に対する理解を深める施設として活動しております。

主な収蔵品は、最上家の四十七代当主最上公義氏からご寄託いただいた、最上義光所用の兜　三十八間金覆輪筋兜をはじめ、義光所用の鉄製指揮棒、鉄扇等の最上家に伝わる貴重な品々、及び義光の二男家親が奉納した兼高作の太刀、義光の四男山野辺光茂の指料と伝えられる来国次の刀、金小札紫糸威最上胴丸等の武器・武具類、義光の書状等の古文書類、狩野玄也筆の四季花鳥図屏風、清源寺からご寄託いただいた武蔵野図屏風等の絵画類のほか、服飾品、調度品等も収蔵展示しております。

新寄託資料について

山形市長谷堂の清源寺が所蔵している「武蔵野図屏風」が平成五年十月八日、特別企画展「日本刀の美～郷土の刀工と県内の名刀～」の開催期間中に寄託されました。

武蔵野図は、武蔵野の風景のイメージを画題として視覚化したものです。

住職の無着道雄氏と檀家の方々の文化財に対する深いご理解によって実現しました。

（平成六年四月二十四日まで展示予定）

最上義光の新史料発見

このたび、新たに最上義光の書状が発見され、義光研究のうえで、極めて重要な内容であることが判明いたしました。

この書状は、山形市落合町の遠藤兵助氏より、山形市へ寄贈の申し込みがあり、その内容調査のため、当歴史館が古筆研究家の武田喜八郎先生に、解読を依頼したところ、天下人織田信長と義光の親交を物語るもので、これまでの定説を覆す史料として極めて重要な書状ということが判りました。

本書状は、縦二〇センチ×横五〇・二センチの奉書紙で、筆使いから考えて、祐筆等の筆ではなく、義光直筆の書状であることが判るとのことです。

※なお、近く当歴史館において展示公開いたします。

おしらせ
――平成六年度予定事業――

特別企画展
（仮称）武人画家・郷目右京進貞繁展
平成六年四月二十六日～五月二十九日

歴史探訪会
平成六年九月～十月予定

こども講座
平成六年九月予定

特別企画展
（仮称）伊達政宗展
平成六年十月一日～十月三十日

歴史講演会
平成六年十一月予定

歴史講座
（仮称）古文書講座
平成七年一月～三月予定

編集後記

五周年を迎える当館では、おかげ様で、歴史館だよりの創刊号を発行することができました。

発行に際し、ご協力いただきました関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

今後も、歴史館に係わる研究資料の提示、情報の提供をお願い申し上げ、次回の発行をご期待下さい。

財団法人　**最上義光歴史館**
〒990　山形市大手町一―五十三
TEL　〇二三六(二五)七一〇一
FAX　〇二三六(二五)七一〇二